北海道大学

先住民・文化的多様性研究グローバルステーション（GSI）

国際シンポジウム 2024

先住民 返還 Indigenous Repatriation

～ 文化　記憶　知識 ～

2024 年 11 月 29 日（金）9:00 AM – 6:30 PM

北海道大学学術交流会館 2F

PROGRAM

08:45	開　場	
09:00-09:05	**開会の言葉**	**加藤 博文 教授**, GSI ディレクター, 北海道大学
09:15-09:55	**Report 1**	**鵜澤 加那子 博士**, 北海道大学 / オスロ大学
	『異世界の間で：アイヌの視点から見た人骨、返還、そして生と死の聖なる連続性』	
09:55-10:35	**Report 2**	**エーヴァ＝クリスティーナ・ニーランダー博士**, 欧州文化博物館
	『ラーチョガーピルの再母系化：博物館界における脱植民地化と先住民化の実践としての出自研究、返還、再母系化』	
10:35-11:00	＝ 休　憩 ＝	
11:00-11:40	**Report 3**	**スーナ・クオリオック氏**, アイトゥ博物館
	『先住民族の博物館の重要性』	
11:40-12:20	**Report 4**	**カール＝ヨスタ・オヤラ博士**, 北海道大学 / ウプサラ大学
	『植民地収集と植民地遺産：北欧諸国における先住民の文化的権利、本国返還と再埋葬』	
12:20-13:20	＝ 昼　食 ＝	
13:20-14:00	**Report 5**	**マイケル・ピッカリング博士**, 北海道大学 / オーストラリア国立大学
	『返還に統合された経験：個人的な物語』	
14:00-14:40	**Report 6**	**ヒラリー・ハウズ博士**, オーストラリア国立大学
		エレナ・ゴーヴァー博士, オーストラリア国立大学
	『アイヌへのアクセス、サーミへの探索：ロシアの記録と機関の概観』	
14:40-15:00	＝ 休　憩 ＝	
15:00-15:40	**Report 7**	**ジェイ・キケット氏**, オーストラリアアボリジニおよびトレス海峡諸島研究所
		ショーン・アンジェルス氏, オーストラリアアボリジニおよびトレス海峡諸島研究所
	『アボリジニおよびトレス海峡諸島の保管者との文化遺産返還: AIATSIS 文化遺産返還プログラム（RoCH）による返還プロジェクトの検討』	
15:40-16:20	**Report 8**	**ダリル・リグネイ教授**, シドニー工科大学
	『ンガリンジェリ返還： 問題、課題、そして成功』	
16:20-17:00	**Report 9**	**フィリップ・ゴードン氏**, オーストラリア政府先住民返還諮問委員会
	『オーストラリアにおける返還プロセスと政策の 40 年にわたる進展についての個人的考察』	
17:00-17:30	**総　括**	**加藤 博文 教授**, GSI ディレクター, 北海道大学
17:30-18:25	**ディスカッション**	
18:25-18:30	**閉会のあいさつ**	**加藤 博文 教授**, GSI ディレクター, 北海道大学

講演者について

Report 1

鵜澤　加那子　博士、北海道大学 / オスロ大学（ノルウェー）

私はアイヌの研究者、アーティスト、文化アドバイザーとして、世界中の先住民の声を広めることに専念しています。AinuToday の創設者であり、K. Uzawa Consult の CEO でもあり、北海道大学の先住民・文化的多様性研究グローバルステーションの助教、またノルウェーのオスロ大学歴史博物館の研究員として活動しています。UiT 北極大学で先住民学の修士号と地域計画学の博士号を取得し、先住民の知識を守るために学問と芸術の橋渡しをしている。ウポポイ国立アイヌ民族博物館の評議員も務め、世界中で共同研究に貢献しています。私の芸術作品は国際的に上演され、アイヌの精神を称え、包括的で文化的に多様な未来を構想している。

タイトル: 異世界の間で：アイヌの視点から見た人骨、返還、そして生と死の聖なる連続性

要　旨: この発表は、アイヌが人骨や死、そして生者と祖先の世界の連続性をどのように捉えているかという哲学的な問いを探求します。アイヌにとって、祖先の遺骨は保管や研究の対象となる遺物ではなく、子孫の生活と深く結びついた永続的な存在を象徴しています。アイヌの伝統では、祖先の遺骨は、生と死が互いに繋がった旅路の一部である神聖な循環の一部とされています。

アイヌ遺骨の返還は、学術的な植民地主義に異議を唱える重要な機会であり、博物館の運営における権力関係を再考するよう機関に促します。返還は、単なる官僚的な行為に留まらず、先住民の主権、文化的癒し、そして祖先の尊厳の回復を意味します。

発表の締めくくりとして、あるアイヌの祖先が植民地時代の博物館で目を覚まし、故郷から遠く離れていることを認識する 7 分間のアートフィルムを上映します。彼女が故郷に戻る夢を見ながら、その旅は死を単なる終わりとする従来の見方に疑問を投げかけ、死を過去と未来、祖先と子孫を繋ぐ架け橋として描きます。この締めくくりは、返還を学術的空間の脱植民地化への重要な一歩とし、先住民の知識を生きた連続体として尊重することの意義を見る人に問いかけます。

Report 2

エーヴァ＝クリスティーナ・ニーランダー博士、欧州文化博物館（ドイツ）

エーヴァ＝クリスティーナ・ニーランダーは、昨年フィンランドのオウル大学ギエラガス研究所（サーミ研究所）で博士論文を発表。彼女の論文は、サーミの返還、再母系化、およびフィンランドにおけるサーミ返還の背後にある考え方や可能性の解体をテーマとしている。彼女は、ノルウェーとフィンランドのサーミ博物館や、スウェーデンの歴史博物館などで勤務した経験があり、特に北欧およびヨーロッパの博物館におけるサーミのコレクション、倫理問題、返還に関して専門的な知識を持っている。長年にわたりサーミ社会と協力してこれらのテーマに取り組んできた。また、フィンランドでのサーミに関する 2 つの展覧会のキュレーションチームにも参加。現在、ベルリンの欧州文化博物館で「MEK サーミ・コレクション：博物館の収集物の来歴研究における多面的アプローチ」というプロジェク

トに従事している。

タイトル: ラーチョガーピルの再母系化：博物館界における脱植民地化と先住民化の実践としての出自研究、返還、再母系化

要　旨: ヨーロッパの博物館界ではパラダイムの変化が見られ、今日では「返還の時代」とも言える状況になっている。北欧の博物館分野でも、サーミの展示物やデュオジ（サーミの伝統工芸品）をサーミ博物館に返還することについての議論が高まっている。私は、サーミコミュニティとの協力による返還に関する出自研究の重要性を強調することで、この議論に貢献します。私はサーミの博物館コレクションを研究するための方法論を提案しており、それを脱植民地化および先住民化と位置付けています。最後に、これらの方法を通じて新たなサーミの存在論を構築するプロセスを示すため、「再母系化」という概念を紹介します。これらのプロセスを通じて、植民地主義による困難で挑戦的な経験が、例えばサーミの真実と和解委員会の活動において役立つ可能性があります。私が紹介する方法は、他の先住民や、世界各地の先住民の物品を所蔵する博物館にも関心を持ってもらえるかもしれません。私の発表は、私の博士論文（2023 年）「返還から再母系化へ：返還に対する態度と可能性の解体」と、サーミ現代アーティストのアウトィ・ピエスキと共に行ったラーチョガーピル帽子に関する実務、およびベルリンの欧州文化博物館のサーミコレクションにおける 8 人のサーミ工芸師との出自研究プロジェクトに基づいています。

Report 3

スーナ・クオリオック氏,　アイッテ博物館ス（ウェーデン）

スーナ・クオリオックは、スウェーデン・ヨックモックにあるスウェーデン山岳およびサーミ博物館アイトゥの民族学者でありキュレーター。スウェーデンにおけるサーミ博物館の専門家として長いキャリアを持ち、特にスウェーデンでの返還問題に携わってきた。アイトゥでの彼女の仕事は、主に収蔵品の管理と、それらを訪問者、特にサーミコミュニティにとって利用しやすくすることに焦点を当てている。この経験を通じて、サーミ博物館がサーミの人々やコミュニティ全体クオリオックは、サーミの収蔵品を持つスウェーデン国内の複数の博物館を訪問し、それらの博物館に知識を提供することに貢献している。

タイトル: 先住民族の博物館の重要性

要　旨: 博物館が収蔵している多くの先住民コレクションは、現在、元々のコミュニティから遠く離れた場所にある。しばしば、これらの博物館は収蔵品や写真について十分な知識を持たないため、それらのコレクションはある意味「死んだ」ものになってしまう。しかし今日では、多くの大規模な博物館が先住民族コミュニティと協力し、収蔵品を共有する取り組みを進め、知識を得ることを目指している。こうした協力はデジタルを介して行われることが多く、博物館にとっても資料や写真を返還する「簡便」かつ資源を節約する方法となっている。しかし、文化に関する知識を持つ博物館が自分たちのコミュニティにあることにはどのような意味があるのだろうか？

アイトゥ（Ájtte）というサーミの博物館での私の経験を共有したい。この博物館は 40 年前に設立され、サーミのアイデンティティを強化し、サーミの知識を次世代に伝えることを目標の一つとしている。自分たち

の文化が主役となる博物館がサーミ地域にあることは、サーミコミュニティにとって何を意味するのか？また、サーミコミュニティに位置することは博物館にとってどのような意味があるのか？サーミの来館者はどのようにして収蔵品を活用し、その存在は博物館にとってどのような意義を持っているのか？この問いは博物館の写真コレクションにも当てはまる。

サーミ博物館の多くの収蔵品はサーミ地域外に存在している。しかしアイトゥ博物館が開館した際、ストックホルム民族学博物館とウプサラ大学は「自分たちの」サーミ収蔵品をアイトゥ博物館に預託した。これはアイトゥ博物館にとってどのような意味があるのか？アイトゥ博物館は他の博物館からサーミの収蔵品を借り入れることもありますが、このような手続きを取ることにはどのような意味があり、どのような課題に直面してきたのか？

アイトゥ博物館でサーミの文化遺産に携わってきた私の経験を通して、先住民族の博物館の重要性と、それが自分たちの先住民族コミュニティだけでなく、社会全体にどのように貢献できるかを示したい。

Report 4

カール＝ヨスタ・オヤラ博士、北海道大学／ウプサラ大学（スウェーデン）

カール＝ヨスタ・オヤラは、ウプサラ大学（スウェーデン）で考古学の上級講師を務め、北海道大学では先住民・文化的多様性研究グローバルステーションの准教授を務めている。彼の主な研究分野は、北フェノスカンジアにおける考古学と文化遺産、サーミの考古学および遺産管理、考古学における政治的側面、文化的権利と先住権、脱植民地化、返還、再埋葬に関する議論である。

オヤラは、北欧諸国とロシアにおける北方考古学の研究史的視点、サーミの植民地的歴史と関係、近代初期のサーミ文化遺物の収集、19 世紀および 20 世紀初頭のサーミ先祖遺骨の収集、現代の文化復興と脱植民地化運動、サーミにおける返還および再埋葬のプロセスなど、これまで多くの研究プロジェクトに携わってきた。

タイトル: 植民地収集と植民地遺産：北欧諸国における先住民の文化的権利、本国返還と再埋葬

要　旨: 近年、サーミにおける北欧の植民地主義の歴史と遺産が学者によってますます探求されるようになり、過去と現在の植民地主義的な側面についての一般の認識も高まっている。サーミにの北欧植民地主義をより広範に検証する必要性の一環として、植民地収集の歴史と遺産を批判的に調査することも必要である。例えば、神聖なサーミの太鼓などのサーミの物質文化の近世の収集や、19 世紀から 20 世紀初頭にかけての、北欧諸国における人種科学の一環としてのサーミの祖先の遺骨の収集などに関するものである。サーミの個人や団体、組織は長い間、遺産に関する自己決定権の拡大やサーミの文化的権利の承認を求め、遺骨や遺物の返還や再埋葬を要求してきた。重要なのは、サーミの遺産管理の状況がサーミ地域の各国（ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシア連邦）で大きく異なる点である。

一方、サーミ地域における植民地主義の問題は、北欧諸国で依然として論争的で対立が生じている。土地権や土地利用を巡る紛争は、たとえば天然資源の開発や狩猟や漁業の権利との関連で増加している。歴史の記述や過去との関わり方は、これらの対立の中心的な要素となっている。

過去と現在の間のこの緊張関係のにある分野では、研究機関や遺産保存機関にとって多くの課題が存在する。本稿では、北欧諸国、特にスウェーデンに焦点を当てながら返還と再埋葬のプロセスの現状と、その広範な影響や重要性について論じ、考古学や遺産管理における政治、倫理、権力の力学を批判的に検証する重要性を強調する。

Report 5

マイケル・ピッカリング博士、北海道大学 / オーストラリア国立大学（オーストラリア）Dr Michael

マイケル・ピッカリング博士は、オーストラリアのファーストネーション（先住民族）遺産の研究者。オーストラリア全土で、アボリジニおよびトレス海峡諸島民の団体、遺産管理機関、博物館と幅広く協力してきた。2001 年から 2022 年まで、オーストラリア国立博物館に勤務し、返還とファーストネーションの遺産に重点を置き活動。

彼はオーストラリア国立大学の文化遺産・博物館学科の名誉准教授であり、北海道大学の先住民研究・文化多様性グローバルステーションの准教授、そしてドイツのケルン大学オーストラリア研究センターのパートナーでもある。

研究関心は幅広く、物質文化、カニバリズム、定住パターン、博物館展示、博物館倫理、返還に至るまで多岐にわたり、これらのテーマに関する記事を発表している。

タイトル: 返還に統合された経験：個人的な物語

要　旨: どの分野においても、返還の実践に深く関わるほど、その経験や学びも増え、時間が経つにつれ、返還に関する様々な疑問、答え、問題、経験が融合し、返還に携わるようになった初期の段階には気付かなかった世俗的な発見にたどり着くことがある。

本稿では、オーストラリアのファーストネーションの遺産に焦点を当て、返還を通して私自身の個人的な旅の中で生じた主な進化について取り上げる。これには、返還に対する政治的、行政的、博物館学的、文化的、学術的な関与に関する私見が含まれる。

これらの経験と発見を共有することで、オーストラリアおよび国際的なファーストネーションのコミュニティとその支援者である研究者、および関連機関による今後の返還活動が促進されることを願っている。

Report 6

ヒラリー・ハウズ博士、オーストラリア国立大学（オーストラリア）

ヒラリー・ハウズは、オーストラリア国立大学の文化遺産・博物館学研究センター内の RRR(Return Reconcile Renew Project)センターのオーストラリア研究評議会 DECRA(Discovery Early Career Researcher Award)フェロー。2007 年から、彼女の研究はオーストラリアおよび太平洋地域から先住民の祖先遺骨や文化的遺物を収集・研究したドイツ語圏の科学者たちに焦点を当てている。彼女の著書には、『オセアニアの人種問題：都市の理論とフィールド経験の間にある A.B.マイヤーとオットー・フィンシュ、1865–1914』（2013 年）、『太平洋の過去を解き明かす：オセアニアにおける考古学の歴史』（T.ジョーンズ、M.スプリッグズと共編、2022 年）、および『返還、科学、アイデンティティ』（C.フォード、G.ナップマン、L.オーモンド＝パーカーと共編、2023 年）などがある。

エレナ・ゴーヴァー博士、オーストラリア国立大学（オーストラリア）

エレナ・ゴーヴァーはベラルーシのミンスクで生まれ、1990 年からオーストラリア国立大学で学び、研究活動を行っている。1996 年に同大学で歴史学の博士号を取得。彼女の研究は、ロシア人とオーストラリアや南太平洋の人々との異文化接触に焦点を当てており、先住民の祖先遺骨や文化遺物の収集と研究の歴史も含まれている。彼女はロシアとオーストラリアで広く出版されており、著書には『私の暗い兄弟：イリン家の物語、ロシア系アボリジニの家族』（2000 年）、『ヌクヒヴァでの 12 日間：南太平洋でのロシア人の出会いと反乱』（2010 年）、および『ティキ：マルケサス諸島の芸術とクルーゼンシュテルン遠征』（N.トーマスと共編、2019 年）などがある。

タイトル: アイヌへのアクセス、サーミへの探索：ロシアの記録と機関の概観

要　旨: アイヌとサーミの人々はそれぞれユーラシア大陸の両端に居住しているものの、ロシアの彼らへの関心には共通点があった。両民族はロシア帝国および隣接する国々に住んでおり、そのためロシア人にとってアイヌとサーミが自国の臣民であることを強調することが重要だった。1799 年には、ドイツ系ロシア人地理学者ヨハン・ゴットリープ・ゲオルギが、ロシア帝国内の民族についての記述の中で、アイヌとサーミについて詳細に表現し、論じている。同時に、アイヌとサーミの両民族は様々な学者が人種学的・民族発生学的理論を構築するための論争の場ともなっていた。ロシアの学者たちは、この両民族が自国に存在することを誇りに感じ、彼らの研究が国際的な学術ネットワークに貢献できると考えていた。

19 世紀から 20 世紀初頭にかけて、アイヌの祖先遺骨や文化的遺物は、民族誌に関心を持つ軍人、海軍関係者、医療従事者、行政官、および政治亡命者によって広く収集された。一方で、サーミの祖先遺骨や文化的遺物に対する関心は、1879 年にモスクワで開催された人類学展の準備をきっかけに高まり、ソビエト時代にも収集が継続された。

近年、ロシアの博物館に所蔵されているアイヌの文化的遺物のコレクションが詳しく研究され、日本の研究者も関わる形で詳細なカタログが発行されている。また、アイヌとサーミの文化的遺物のコレクションに関する情報はインターネット上でも広く公開されている。しかし、頭蓋学的および人類学的コレクションの歴

史はほとんど研究されておらず、ロシアの機関はその所蔵品についてあまり公開していない。本報告では、これらのコレクションの歴史を追跡するための取り組みを紹介し、祖先遺骨がどこから持ち去られ、誰によって収集され、どこに収蔵されているか、そして現在の所在について概説する。また、ロシアの機関に連絡する方法や関連する記録にアクセスする方法についても説明する。

Report 7

ジェイ・キケット氏、オーストラリアアボリジニおよびトレス海峡諸島研究所（オーストラリア）

ジェイ・キケットは、文化遺産返還プログラムの代理ディレクターであり、誇り高きヌンガー族の出身。過去 25 年間にわたり、アボリジニ問題に関する様々な高官職で働いてきた。これには、アボリジニ・トレス海峡諸島委員会、教育省（先住民教育）、首相府・内閣および法務総省での住民投票評議会の先住民相談マネージャーとしての役職が含まれる。

彼は最近まで、ニューサウスウェールズ州アボリジナル土地評議会において南部地域のゾーンディレクターを 5 年間務め、AIATSIS に加わった。

ショーン・アンジェルス氏、オーストラリアアボリジニおよびトレス海峡諸島研究所（オーストラリア）

ショーンは、ノーザンテリトリーのアレンテ族とクンガラカニ族の出身。彼はオーストラリアアボリジニおよびトレス海峡諸島研究所（AIATSIS）において文化遺産返還プログラム（RoCH）のアシスタントディレクターを務めている。

以前は、ノーザンテリトリーの博物館・美術館およびシュトレロウ研究センターで文化返還マネージャーを務め、オーストラリア政府の先住民返還諮問委員会の元メンバーでもある。

ショーンは、アレンテの人々のために、文化的に関連する資料のマイクロコレクションを統合するための研究手法を開発してきました。これには、秘儀・神聖な物品、儀式の映像、儀式の歌の録音、写真、家系図、そして関連する文書が含まれます。

タイトル: アボリジニおよびトレス海峡諸島の保管者との文化遺産返還: AIATSIS 文化遺産返還プログラム（RoCH）による返還プロジェクトの検討

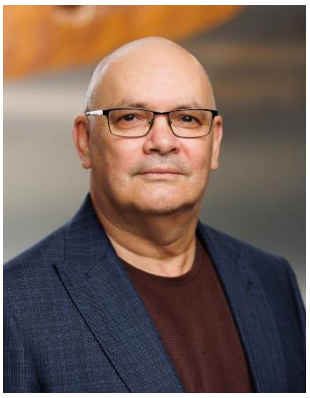
要　旨: オーストラリア先住民およびトレス海峡諸島研究所（AIATSIS）は、アボリジニおよびトレス海峡諸島の人々の多様な歴史、文化、遺産に専念するオーストラリア唯一の国立機関です。 AIATSIS は、文化遺産返還プログラム（RoCH）を主導し、海外に保管されているアボリジニおよびトレス海峡諸島の文化遺産資料とそのコミュニティとの協力を進めている。RoCH プログラムは、海外に保管されている文化遺産資料に対する保管者としての権利を再確認し、それがどこでどのように最適に管理されるかを決定する権利を支援している。

文化維持と活性化のために資料を故郷に返還することは、アボリジナルおよびトレス海峡諸島のコミュニティがしばしば望むところで、返還の形態—返還、貸与、デジタルコピー—については、保管者がこの願いを

実現するために決定します。

Report 8

ダリル・リグネイ教授, シドニー工科大学（オーストラリア）



ダリル・リグネイは、ンガリンジェリ族出身で、シドニー工科大学のジャンブナ研究所において、先住民族国家建設とガバナンス研究ハブの教授兼ディレクターを務めている。彼はンガリンジェリ地域当局、ンガリンジェリ先住民の権利管理委員会の理事、および返還研究や交渉・返還におけるンガリンジェリの代表団に参加してきた。リグネイは、「Return Reconcile Renew」（2013-2016）および「Restoring Dignity」（2018-2020）という返還プロジェクトで主任研究者を務め、また、現代のンガリンジェリ意思決定機関と仕組みの構築において極めて重要な役割を担っており、2016 年から 17 年にかけて南オーストラリア州との条約交渉においてンガリンジェリの共同交渉者であり、ンガリンジェリのスポークスパーソンに任命された。

タイトル: ンガリンジェリ返還： 問題、課題、そして成功

要　旨:

ンガリンジェリ Ngarrindjeri はマレー・ダーリング盆地の最南端に位置する河口域に住む先住民族で、ムランディ川の淡水がクーロン川、ロアウ湖、マレー川の河口を通り、南大洋の潮汐の塩水と混ざり合う「水の出会い」が起こる場所である。ンガリンジェリは常にこの地を占有し、土地や水を譲り渡したり売却したことは一度もありません。

本報告書は主に、1980 年代初頭からのンガリンジェリ民族の遺骨返還の取り組みを概説するものである。そうすることで、私たちがンガリンジェリ族の祖先（旧住民）に対する法的責任を果たし、ンガリンジェリのルウェ/ルワル（大地、水域、すべての生物）にとっての未来を確保するために取り組んでいる民族の課題や成功について述べている。ンガリンジェリ族は、人々の健康は土地と水の問題や課題、そして健康と密接に関わっていると信じている。

過去 30 年間、ンガリンジェリ族は国内外の機関と交渉し、限られた資金の中で旧住民の遺骨返還を求めてきた。政府や諸機関の不誠実な対応に直面しながらも、何百人もの旧住民の遺骨を故郷に戻し、いくつかの再埋葬を行ってきた。ンガリンジェリ族は、返還に関する多くの側面について豊富な経験を持っている。ンガリンジェリ族が、盗まれたすべての旧住民を安らかに眠らせるために直面している複雑さは、調査、交渉、翻訳、癒し、自己決定、「尊厳の回復」というプロセスとして本報告書で特定されている。

この活動により、何百人の旧住民が故郷に戻れただけでなく、世界中の他の先住民族や関連する主要機関や研究者と重要な連携やネットワークを築くことができた。この歴史は様々な出版物や RRR（Return Reconcile Renew）ウェブサイト（特に、https://returnreconcilerenew.info/community-stories/NRA.html）に掲載されており、先住民族にとってより良い結果を保証する新しい実践と政策へのアプローチを支援し、教育するための助けとなっている。

Report 9

フィリップ・ゴードン氏、オーストラリア政府先住民返還諮問委員会（オーストラリア）

クイーンズランド州中部出身のグーラン・グーラン族の一員。

現在、コミュニティ文化コンサルタントとして、博物館関連の事柄について助言を行っている。また、政府機関に対しても文化遺産や政策開発に関するアドバイスを提供している。以前はシドニーのオーストラリア博物館で先住民遺産部のマネージャーを務め、博物館のアウトリーチや祖先および重要な文化財の返還といった問題についてコミュニティに助言を行っていた。

また、オーストラリア連邦政府の先住民返還諮問委員会の共同議長も現在務めている。戦略的政策の開発と実施の分野においては、現在、オーストラリア・フランス共同科学返還委員会のメンバーとして、フランスの公的コレクションに収蔵されている祖先の返還に向けた取り組みを進めている。さらに、2019 年と 2020 年には、オーストラリアアボリジニおよびトレス海峡諸島研究所（AIATSIS）のナショナル・レスト・プレイス先住民諮問委員会のメンバーも務めた。

また、出身コミュニティが特定されていないオーストラリア先住民の祖先の長期的なケアについて検討する「ナショナル・レスト・プレイス協議報告書」の作成にも関わった。

ゴードンは、シュトレロウ研究センター管理委員会のメンバーであり、ニューサウスウェールズ州の博物館とギャラリーの管理委員会のアボリジニ諮問委員会のメンバーでもあり、引き続き、政府機関に対して文化遺産や政策開発に関するアドバイスを提供していく。

タイトル: オーストラリアにおける返還プロセスと政策の 40 年にわたる進展についての個人的考察

要　旨: オーストラリアは現在、先住民の遺骨返還におけるリーダー的存在として評価されている。多くの点で、これは根拠のあることだ。しかしこの状況になったのは、学術界や政府、博物館が道徳的・倫理的にそれが正しいと考えたからではない。内部および外部からのさまざまな要因が影響し、その大きな原動力となったのは、100 年以上にわたりオーストラリア先住民が祖先の帰還を求め続けた運動と活動であった。本講演では、こうした影響要因について探っていく。

先住民族とオーストラリアの博物館と政府との間で、当初から現在も続けられている話し合いの重要な側面は、返還が重要である一方で、博物館と政府はこれを先住民と文化団体との新たに拡大された関係の出発点として考えるべきだという点であった。こうした幅広い問題についての議論は当初返還によって始まったものだが、文化団体が先住民のみならず、彼らが奉仕する広範な社会にとってもより意味のある存在になるための重要な役割を果たしており、返還プログラムの議論に常に含まれるべき要素となっている。

現在のオーストラリアには、さまざまな政府レベルや博物館が、過去 40 年間にわたって先住民の文化的要求に応えるために整備した政策、手続き、資金モデルが存在し、これらは多くの点でその目的を果たし続けている。しかし、これらのプログラムはより柔軟で拡張的である必要があり、オーストラリア先住民の変化するニーズに応えるものとならなければならない。

オーストラリアの返還が直面している新たな課題には、適切な形でのリソース提供や、DNA やその他の医療研究といった新たな発展分野での政策の継続的な発展が求められています。

返還は現在、文化団体の活動における重要な要素だが、オーストラリア先住民にとってその意義を保ち続けるために、常に進化し続ける必要がある。

総括およびモデレーター

加藤　博文　教授, 北海道大学（日本）

加藤博文は、北海道大学のアイヌ・先住民研究センターの教授で、先住民考古学と先住民文化遺産を専門としている。現在、礼文島での国際フィールドスクールを主催しており、平取町や弟子屈町のアイヌコミュニティと協力して文化的景観に関する共同研究を行っている。

また、北海道大学の先住民・文化的多様性研究グローバルステーション（GSI）のディレクターを務めており、ウプサラ大学考古学・古代史学科の考古学部門の客員教授、オックスフォード大学考古学研究所のアジア考古学・美術・文化センターの研究フェロー、そしてイルクーツク国立大学の名誉教授でもある。

タイトル: 先住民の遺骨返還と学術界の責任

要　旨: 先住民の遺骨返還は歴史の新しい章を開くものであるが、それがすべての側面に光を当てるとは限らない。特に、返還の過程で明らかになる事実は、先住民コミュニティに新たなトラウマや心理的なストレスを引き起こす可能性がある。返還の対象には、遺骨や文化的な遺物だけでなく、記憶や知識も含まれる。重要なのは、返還を植民地主義の負の遺産への対処として終わらせることではなく、返還された歴史や記憶、知識を発展させていくことである。本報告書では、日本における先住民の遺骨返還の現状を基に、非先住民コミュニティが何をできるのか、特に先住民の遺骨返還に関連する学術界の意義と責任について考察する。

同時通訳機器について

同時通訳機器は会場入口にて貸し出しをしています。ご退場の際にはご返却ください。
ご理解とご協力をお願いいたします。